

『子ども一〇〇年のエポック』

「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで』を読んで

津守 真

この本を手にして、私にしては珍しく一気に読んでしまった。それは私自身が身近に知って来たこの一〇〇年間の歴史を、子どもを中心に据えて広い視野から見せてくれているからだろう。「幕を降ろす前に」と著者が序章で書いているように、私共がその大半を生きた二〇世紀を終わる前

に急いでこの時代を振り返りたいという著者の心の促しがあつたのだろう。そして二〇世紀の悲惨にもかかわらず、子どもにかかわる人々が望みをもつて次の世紀に足を踏み出すことができるようにとの思いが底に秘められているのではないだろうか。

エレン・ケイの「児童の世紀」というスローガンのもとに幕開けした二〇世紀は「進化論に触発され、新しい科学の力に過剰なまでの期待を寄せた」(P.10)時代であり、そのスピーディな成り行きを私共の時代は見たのだった。子どもの出生については著者は、「子どもが授かった」という昔の人々の敬虔な表現から、「子どもを作るも作らぬも自分の意志次第」(P.11)という生命観へと子ども観の根底が揺るがされてしまった。それが無意識のうちに子どもを「モノ」のように把握させてしまったという著者の考えに私は教えられ、同感した。現代の生活のすみずみにまで浸透するようになったその成り行きを、この著者ならではの多くの資料を駆使して二〇世紀が跡づけられる。

私は「七歳までは神のうち」という日本の諺について、この著者から直接にご教示を得たことが

あるので、そのことに言及したい。この諺は「間引き」「墮胎」にも関連するが、日本人はそれを「お返しした」「山へ行かせた」(P.57)と言った。それは眼前の現実を糊塗する気慰めの言葉という冷たい見方にも著者は気が付きながら、それ

◀「子ども一〇〇年のエポック

「児童の世紀」から「子どもの権利条約」まで」

本田和子著 フレーベル館 二〇〇〇年四月



よりももっと、「子どもの死に対する『あわくおほろな』心持ちが人々のなかにあつて言葉はその現れに過ぎない」(P.58)という温かさをもつて考えている。この著者の眼はいつも複眼である。

私共がよく知っている第二次世界大戦のときには、ファシズムは「童心」を巧に活用して(P.111)ヒットラー・ユーゲントが組織され、日本では日の丸の鉢巻きをした少国民がつくられた。著者は世界と日本とを対置しながら、戦中から更に、現代の構造主義や心理学にまで言及する。これは私もその中にいた各時点では身辺の戦いに忙しく、予感しつつも全貌が見出せなかった。それをなかば通り過ぎたいま、著者はさまざまな文化資料を提示し跡付けて見せてくれる。そして、二〇世紀後半とくに「子どものために」と創出された学校や子ども関連の営み、諸制度が本当に子どものためであったのかと「いま問い直されよう」と

して」(P.259)その答えは出ないままに二〇世紀の幕は下ろされようとしている。ここに紹介しきれない多くの資料、ことに「子どもを抱え込む市場原理」(P.226)、デパートの出現と子ども向け商戦などの現代分析はこの著者の独壇場である。

最後に著者は、「子どもの権利条約」を、子どもを保護・教育の対象から一人前の「権利主体」と見なすことへの転換である点を強調し、これが「この世紀が後世に託した人類最大の悲願」「遺産」であると考えてこの書物を結んでいる。

「少子化」と「長寿社会」という私共が若いときには考えもしなかった時代の大波に、私共は翻弄されている。著者の言う幼児に対する「あわくおほろな」心持ちを、保育にかかわる私共は次の時代へとどのようにして残して行けるか。この書物を閉じて私は考えた。